

### 第三部 ◆ 身心変容の哲学

# ジェイムズの心霊研究圈における 身心変容問題

津城寛文

筑波大学大学院哲学・思想専攻教授／宗教学・神道行法研究

## 1 課題

一九世紀末以来の心霊研究の対象には、身心変容と呼ぶべき現象（トランス、憑依などメンタルなものや、同時両在 [bilocation]、身体浮遊 [levitation]、身体伸長 [elongation] などフィジカルなもの）が溢れていた。これらはすべて「霊媒」の周辺で起こったが、彼（女）らの何らかの特殊な能力・資質（があったとしても、それ）は先天的・突発的なものであり、起こったことに關しても非自発的・受動的であったので、そこでは当事者（霊媒と研究者のどちらにとっても）の目立った技法が主題となることはなかった。他方、「死者」が重要な作用者として、見え隠れしている。本論では、ジェイムズの心霊研究を中心に、ジェイムズの語り直しとも読める最近のアーヴィン・ラズロの議論まで視野に入れて、「霊媒術」「靈界通信」「自働現象」（心霊研究用語）、「人格転換」（精神医学

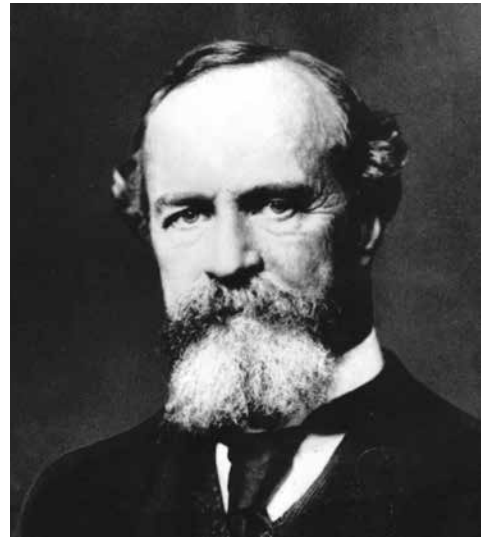
用語）、「憑依託宣」（宗教人類学用語）などと呼ばれる現象の核となる、死後存続の論じられ方について論じてみる。浮き彫りにしてみたいのは、死後存続の人格・個（人）性（personality）、自律性（autonomy）、個性性（individuality）を考える際に見え隠れする、「中心・中枢（center）」という捉え方である。死後存続の問題を、死者の「センター」に注目して考えるという課題、とくにそれをジェイムズ研究の文脈で考えることは、管見のかぎり、私のオリジナルである。死者には生者と同様の自律性、個（人）性、個性を保持するセンターがあるかどうか、それとも生者（の記憶や意識や脳）に寄生して「役柄」を演じるだけなのかというのは、ジェイムズが最後までこだわり続けた問題であり、その可能性は精粗に考えられた。最も粗くは、「死者のスピリット」説と「記憶や連想」説とが、対比される。ところが、そのあいだに「意志」を考えて、背後に「コミュニケーションの能動的原因、明確に限定された意志」がある、と

されると、網目が細かくなってくる。

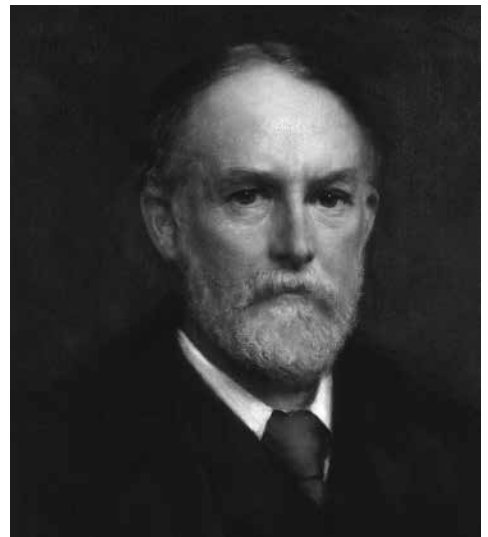
「意志」はジェイムズ哲学で重要なキーワードの一つであり、霊媒現象に関連しても、「二つの意志」が重要な意味を担っている。死者の記憶や連想の背後（↓センター）に、明確に限定された意志がある、という想定は、死後存続問題の急所である。ここに注目すると、死者は、「意志のセンター」として、生者と同程度の自律性を持っているかもしれないという、ジェイムズの「思弁的生物学」が浮き彫りになる。

意識は、人と人、また人と環境のあいだの「コミュニケーションの網」であるということ、他方また、自分が「意識の中心」であると同じく他者も「意識の中心」であることは、全員が合意する。意見が分かれるのは、個々の「センター」と全体の「ネットワーク」のどちらが先在的か、という点からである（ハンフリー、一七八、一九一頁）。

ところがこの同じ問題が、生者ならぬ死者に関し



ウィリアム・ジェイムズ



フレデリック・ウィリアム・ヘンリー・マイヤーズ

ては、死者も意識のセンターであるかどうか、という段階から、すでに意見が分かれる。このあたりで脳の機能が問題となると、心霊研究では、死者はその機能をどう保存するか、という問いになる。「脳」の機能をテーマの一つとする講演で、ジェイムズは、「生産機能」と「伝達機能」を区別し、脳は意識の伝達器官であると説明した。しかしこの伝達理論では、有限の肉体器官がなくなったあと、個人性の特徴である「有限性」がどうなるのか、曖昧であり、「大理論」的な説明にとどまる。

したがって、「有限性」を持つ不死性の想像には、伝達理論を超えたものが必要になる。つまり、肉体や脳なしに、アイデンティティを維持する器官や組織、システムがなければならない。この仮説をわかりやすい比喻にして語る（に落ちる）とすれば、生体の脳神経系に対応する霊体の器官系があり、それぞれの活動は対応する、となるだろう。

まさにそのように端的に表現しているのが、「マイヤーズ通信」と呼ばれる文書、ジェイムズの友人マ

イヤーズの死後、二〇年ほどして自動書記された作品である。そこでは、「宇宙的貯水池」の内部のトポグラフィは何かという問題、ジェイムズが「マイヤーズ（の）問題」と命名した問いに、端的な答えが綴られている。

ジェイムズその人の研究には、根本的経験、多元的宇宙、信じるという意志、余剰な信仰、プラグマティズム、宗教経験（神秘主義と回心）、心霊研究などの圏域があり、それぞれ分離しながら、あちこちで浸透し合っている。ジェイムズ研究者は、これらのどこか（単数、複数）に重点を置いている。このうち、ジェイムズの心霊研究そのものに焦点を当てたジェイムズ論は少数あるが（たとえば最近では、堀、二〇一一年、などは、かなり立ち入ったもの）、単著となると管見のかぎり見当たらない。ただし、密接に関連するテーマとしてここに立ち寄るものは少なくない（たとえば、沖永、二〇〇七年、伊藤、二〇〇九年、などは、章・節レベルで、触れている）。

## 2 現代日本のジェイムズ研究者は、心霊研究にどこまで踏み込んでいるか

伊藤邦武と沖永宜司は、ジェイムズ研究者としてはトップグループ（と評価された受賞作品）で、かつ心霊研究の核心部に説き及んでいる、典型例である。死後存続問題を第一の関心としないこの二著が、どこまで立ち寄って、どこから立ち入っていないか、確認する。

沖永宜司『心の形而上学——ジェイムズ哲学とその可能性』（創文社、二〇〇七年）は、「仏教的な空」「無我」を虚焦点として見据えながら、ジェイムズの「純粹経験」「意識の流れ」を吟味したものである。強調したいのは、自己・自我・我・主体等々といった「作用の極（点）」が、純粹経験や空の体験においては消去される「概念形式」であるという「究極」の議論と、「死後にも存在する意識をもった靈魂が存在」するか、死者は「生身の人間のような個人的な意識において存続」しているかといった、死者の意識の有無を問う議論との、レベル差である（沖永、三六三、四八一―四九二頁）。沖永の整理によって浮き彫りになるのは、究極のレベルの議論では、私たち人間の意識の中心性すら「消去」されるのに、「死後」を論じるレベルでは、生前の意識の個人性、「生身」の「個人」の意識は前提されつつ、「死後」の意識の個人性が疑われる、というダブルスタンダードの推論である。

そのような推論では、生きている私の心は実体ではないが、しかし自律的に機能しているようにも感じられ、他方、死者の魂はもちろん実体ではなく、かつ自律的な機能も持たないようだ、となる。後半の部分は、死者の魂もちろん実体ではないが、しか

し自律的に機能しているのではないか、と考えることが不可能ではないにもかかわらず、である。

伊藤邦武『ジェイムズの多元的宇宙論』(岩波書店、二〇〇九年)も、冲永と同様の話題を、広く関連付けつつ論じているが、とくに「多元的宇宙」と「純粹経験」に焦点を絞り、ジェイムズが、宇宙(精神を含む)の構成要素、基盤として、精神要素を想定し、世界観としては汎心論に立っていたことなどを論じ、その延長線上で心霊研究に立ち寄って、霊媒が死者の言葉を語る霊界通信をめぐる議論を検討している。そこで注目されるキーワードが、「コミュニケーション」(言葉を交わそう)とする意志(will to communicate)と、「人格化しよう(役柄を演じよう)とする意志(will to personate)」の二つである。

この対をなす二つの意志に関して、伊藤はつぎのようにまとめている。「コミュニケーションとする意志」は「外部」の者から、「人格化しようとする意志」は受け取る者(霊媒)からそれぞれ発して、両者のコオペレーションによって霊界通信が起こるとジェイムズは説明しているが、しかし誰の言葉なのか、ジェイムズにもパイパー夫人にも確信がなかった、というものである(伊藤、一〇七一〇八頁)。

これは誤ったまとめではないが、引用・検討している箇所(James 1986, p.356, 359)に挟まれた数頁には、つぎの節で検討するとおり、さらに立ち入ったことが、思考実験的に論じられている。延々と空想が展開される部分は、よほど興味がなにかぎり敬遠される。

同じ「二つの意志」について、その出所という「限定された問題」に集中したのが、堀論文(堀、二〇一一年)である。「コミュニケーションする意志」の伝える真実の情報のソースは何か、ジェイムズは箇条書

きで七つに整理した。(1) たまたま当たった、(2) 多くの人が知っている噂、(3) 参加者が不注意にほめかした、(4) 生前のホジソンから聞いていたことが霊媒の何かの記憶にあった、(5) 生前のホジソンその他から交霊会で聞いたことが、覚醒時はアクセスできない霊媒のトランス状態の記憶にあった、(6) テレパシーという説明できない仕方、参加者や遠くにいる生者の心を探った、(7) 宇宙的貯蔵庫(cosmic reservoir)のようなものへのアクセス。そこでは地上の諸事実のすべての記憶が貯蔵されて、連想を成すパーソナルな諸センター(personal centers)のまわりに集められている。

堀はこれを説明した上で、二つの意志についての伊藤の区別を確認し、何歩か踏み込んでいるが(堀、二〇一一年、二二〇―二二六頁)、さらにあと数歩、踏み込んでみたい。

まず、堀が指摘したような、情報のソースの七つの整理に先立ち、ジェイムズは「死後生存しているホジソンの霊以外(Other than R. H.'s surviving spirit)」のソースとして、と断っているのが、番号がついていないこの「死後生存しているホジソンの霊」の可能性を合わせて、真実の情報のソースは、八つになる(James 1986, p.255)。

つぎに、これと関連することだが、伊藤と堀がともに、ジェイムズ説における「コミュニケーションしようとする意志」は、霊媒の内部あるいは外部としつつ、「人格化しようとする意志」は、一貫して霊媒の内部に位置付けているのに対し、ジェイムズは必ずしも「内部」だけとは考えず、「外部の意志(cosmic will)」(James 1986, p.359)を射程に入れている。またこの周辺には、類似した性格を持った意志も、論じられている。

このような細部が気になるのは、私がジェイムズその他と共有する、心霊研究の知識によるものであり、ジェイムズ自身も微妙な言い方をしているところなので、ジェイムズの文章に沿って、検討しよう。

### 3 ジェイムズの本文の襲に分け入る

ジェイムズの文体の特徴は、心の現象を論じるときは、回りくどい表現になることだが、とくに心霊現象を論じる際は、それが捉えにくいのに応じて「形式的に散漫」となり、心霊研究が批判を受けやすいのに比例して慎重になり、細かく説明するために入り組んだ表現になり、短絡的な誤解を避けるために用語が工夫され、等々が重なって、ひととき襲の多い、流れの悪い文章になっている。他の主題を語るときのジェイムズの、「読者に伝わりやすいように」という心がけが、ここでは敢えて放棄され、わざと持って回った表現になっている。これから検討するあたりが、ジェイムズ心霊研究の核心と思われる。ジェイムズが「二つの意志」をとりあえず明確に対比させた上で、微妙な話を始める重要な部分は、つぎのような断固とした口上で始まっている。

つまり問題はこうである。このように前提された意志がアクチュアルにそこにあることを、どんな姿で思い描くのが、最も理にかなっているのか？ ここでまたいつもの如く、さまざまなブネウマ論的な可能性があるが、それらはひとまず抽象的な形で考えなければならぬ。[……] コミュニケートしようとする意志は、永続的なモノ(Entity)から来るのかもしれない、あるいは場合

に応じて出現するモノから来るのかもしれない。ホジソンの霊であれば、永続的なものであろう。また劣位の寄生的な霊（「ダイモン」やエレメンタルなど、伝統的にありとある名前と呼ばれたもの）であれば、それも永続的なモノであろう。間に合わせにできた（improvised）モノは、地球の記憶の宇宙的貯水池から浮き上がる、一つの限定された意識のプロセスかもしれない。それが起こるのは、特定の踏みならされた道（traces）における系統的活動性（systematized activity）に好都合な、ある条件が満たされたときである。（…）

もし人の夢遊的なあるいは自働的なプロセスが、異なった階層の霊的なモノたち（spiritual entities of a different order）と関係を分担し、互いに干渉するという傾向が、事実としてありそうだとすれば、そのときは、コミュニケーションしようとする意志（と私が呼んできたもの）だけではなく、人格化しようとする意志すらもまた、霊媒自身の夢的生活の外部にあることになるかもしれない。支離滅裂のすべてが彼女だけの責任ではなく、彼女よりも劣位の意識のセンター（centres of consciousness lower than hers）が関与しているのかもしれない、それはちょうど、より優位のセンターが、流れの中の真実の支流に属するより説明しがたいことを引き起こすかもしれないのと、同様である。（James, 1986, pp.356-357）

これを受けて、さらに「面白くなってくる」のが、つぎのような部分である。

こうしてさまざまな可能性の筋書は、込み入って面白くなってくる。そして私たちがつぎのように

問いかけると、筋書はさらに込み入ってくるのである。眠っている、あるいは半ば眠っている状態の意志が、霊媒がトランスに入ることによって、間歇的に再活性化され、意識を持った霊の人格になるのは、如何にしてか？（…）

あなたの行いが後になって意識的に思い出されるためには、それは物質的宇宙に痕跡を残さねばならない。生きているあいだ、その痕跡は、おもに脳にある。しかし死によって脳が失われると、痕跡は行為のあらゆる記録という形で存在し、それは外的宇宙に貯えられることになるので、宇宙は人間のすべての行いによって構造を変えていく。

物質的自然の大きな連続体の中には、何かの諸領域があり、そこには系統的な活動の潜在力が生来備わっているのだ、そのどこかの（諸）部分で活動が始まる時にはいつでも、強調された活動が起こる。物質的痕跡の残りもすべて同時に振動を作り、この宇宙は再び、ホジソンというシステムの活動を持つことになる。この振動するシステムの「意識的局面」は、ホジソンの霊が生き返ったものとなるかもしれない。当該の霊に対応するような物質的痕跡のシステムは、不完全にしか立ち上がらない。私自身は、外部からコミュニケーションしようとする意志がそこにあるように感じる。（James, 1986, pp.357-359）

とりまとめると、霊的なモノたちは、「意識のセンター」である可能性があり、その場合、ジェイムズの心の哲学からいえば、生者が意識のセンターであるのと同じリアリティを持っている。また、モノのレベルの系統的な活動性（Systematic activity, systematised activity）、帯域（traces）、（神経）系、（神経）束（James,

1986, pp.357, 358）といった表現は、ホジソン論文の書評の一節の、生者のレベルにおける「神経組織の習慣（habits of neural organization）」という言葉（Ibid. p.190）に対応する。

ここでジェイムズは、霊媒の潜在意識の活動が、「人格化」の主要な原因であることを、「変装」という用語で強調している。「人格化しようとする意志」が、もし霊媒側にあれば、それは（他人を演ずるのだから）「変装しようとする意志」と言い換えるのがふさわしい、ということである。

とはいえ、すでに見たように、「人格化しようとする意志」の重心も霊媒の外部にある、つまり霊にあるかもしれないという仮説（細々とした主張）を、ジェイムズは考えていた。まして、記憶内容については、霊媒の外部に重心があることを、「宇宙的貯水池」という有名な表現で、展開していた。ここでは、生者における神経組織の習慣と、死者における系統的な活動性の帯域は、類比的に考えられており、生きている有機体の組織は、霊におけるシステムティックな活動性に対応する、という仮説につながる。

#### 4 脳の機能に対応する「心霊的意識網」という仮説

心霊研究の意義、それに関するジェイムズの姿勢、個人的な結論の選択、などについて、心霊研究圏の内向きに報告した文章や、また哲学的、心理学的著作の中で心霊研究に言及した文章のほかに、外部の知識層向けの入門的な文章が、二つある。一つは、ハーバード大学の「人間の不滅性を研究するための寄付講座」インガソール講演で行った「人間の不滅性——想定される二つの反論」（一八九八年）、もう一つ

は最後の原稿となった「ある『心霊研究者』の確信」(一九〇九年)である。どちらも読みやすく、よく引用もされている。またどちらも共通して、自他の区別ある個(体)性、人格性が、関心の的になっている。ここでは、まず「脳」の機能が中心テーマとなっている前者を検討し、一〇年後の「確信」で補足し、そのビジョンを、「マイヤーズ通信」の仮説につなげてみる。

「人間の不滅性——想定される二つの反論」のポインントは、私の関心からは二つあり、一つは脳の機能が意識の伝達にあるという主張、もう一つは脳という肉体器官がなくなったあと、意識の個(人)性はどうなるかという設問である。前者は現在の脳科学でも問われている問題、後者は現在あまり問われない心霊研究特有の問題である。

脳の機能が伝達にある、という前者の主張は、湯沸し器、引き金、鍵盤、プリズムなどの比喻によって示される(James, 1973, pp.288-299)。

ジェイムズは脳の「伝達の機能」に関して、それによる意識の変容は「閾を通常よりも下げる」ことによるとだけ説いて、「どのように下げるか？」という技法に関する問いはない。何らかの理由によって「脳の閾」が下がると、ここを超えた世界から流入があるという、ブラックボックス的な説明にとどまる。この伝達理論は、脳の閾が意識を制約することを示すが、では、脳という肉体器官がなくなったあと、意識の制約はどうなるか、有限な人格、アイデンティティはどうなるのかと問うのが、つぎの一節である。

私たちが望むのは、個人としての制約(restrictions)であり、自分が自分で、他人は他人であると区別できる、それぞれの傾向、特徴であり、つまりア

イデンティティを保つことである。私たちの有限性(finiteness)や制限(limitations)が、私たちの人格的エッセンスのように思われる。有限の肉体器官がなくなったあと、その制限や条件はどうなるのか？(James, 1973, p.301)

この問いは、哲学心理学から、すでに心霊研究側に踏み込んでいる。「ある『心霊研究者』の確信」はさらに歩を進め、結論部には、肉体と脳なしに、意識を制約し、有限なアイデンティティを維持する器官や組織、システムは何か、という問いが綴られる。

このような共有の意識の貯水池を仮定すれば「……」問題は、その構造は何か、その内部のトポグラフィは何か、ということである。この問いは、マイヤーズによつてはじめて正確に定式化されたもので、以後の科学者によつて「マイヤーズの問題」と呼ばれるに値する。この母なる海における、個体化あるいは孤島化の条件は何か？ その中で諸人格は別々に機能するどのような帯域、どのような系統的活動に対応しているのだろうか？ また個々の「霊たち」は、そこに存在するのだろうか？「……」どれくらい永続的だろうか、あるいは束の間の存在だろうか？ どのように相互に影響し合うのだろうか？ そして再び問うが、宇宙的意識と物質との関係は、何だろうか？ 物質のより微細な諸形態があつて、それらは折にふれて、魂の海における諸個体化と機能的に連結し、その時、その時だけ、姿を見せるのだろうか？(James, 1986, p.374)

霊の系統的活動(systematic activity, systematized activity)

の帯域(tracts)、(神経)系、(神経)束が、想像されて、それらが、生者における「神経組織の習慣(habits of neural organism)」に対応していることを、示唆した。生者における神経組織の習慣と、死者における系統的な活動性の帯域が、類比的に考えられて、生きている有機体の組織は、霊におけるシステムティックな活動性に対応する、という仮説が、ジェイムズの文章から浮き彫りになる。

この仮説をわかりやすい比喻にして語る(に落ちる)とすれば、肉体の脳神経系に対応する霊体の活動系があり、双方の回路は対応する、となる。ジェイムズがこのように持つて回った言い方をしていくところを、「マイヤーズ通信」(一九二四—一九三四年の書記)は、以下のように端的に表現して、ニューサイエンスに近付いている。

まわりに巨大な蜘蛛の巣があると想像せよ。この蜘蛛の巣の糸が、記憶ないし想念を、あたかも電線が電気を伝えるように脳髄に運ぶ(カミング、二〇〇〇年、一一九頁)

記憶は海に似ている「……」あなたがたの周囲にあつて、大洋の水のように捉えどころがない。「……」あなたがたのまわりを取り巻く湿気のようなものだとも言える。地上にある時もあなたがたはほとんど無意識の中に、この見えない記憶の貯蔵庫から記憶を引き出しているのである(同、一二二頁)

われわれ(帰幽者)は物質的脳は持たないが、ある心霊的意識網(psychic web)を持っている。この網は正確には脳の方式と違ったものである。それ

は無数のニューロンとか神経区画を持つわけではないが、その代わりにいくつもの意識中枢 (centers) を持ち、それが〈大統一原理〉(本霊) から流れ込む心霊エネルギーを吸収している(同、一三二頁)

人間の魂は想像力の働く有限の焦点であり中枢 (finite focus or centre for imagination) なのである。これは高次の意識レヴェルで物質的身体と関係をもつて働くときは殊にそうなのである(カミンス、一九八六年、一一頁)

生者の意識・記憶も死者の意識・記憶も、すべて包含される宇宙的貯水池のトポグラフィを問いかける問いを不問に付すと、宇宙的貯水池と個々の生きている人間の意識は、全体とその部分という、きわめて大雑把な「一即多」というブラックボックス理論にならざるを得ない。「マイヤーズ通信」は、宇宙的貯水池の内部のトポグラフィは何かという問い、ジェイムズが「マイヤーズ(の)問題」と命名した問いに、端的に答えている。

## 5 個性の死後存続説のプラグマティックな選択

心霊研究に不快感を抱きつつ研究したジェイムズは、とくにパイパー現象の理解に戸惑い、「このように、パイパー夫人のトランス記憶は、通常の人間的な記憶ではない。この無類の正確さを説明するには、彼女の孤立したサブリミナルセルフに自然な能力が付与されているとするか、あるいは、通信する『霊』によって運ばれる別々の記憶システムが集まったものとするか、二者択一である。この選択をするため

には、それなりの準備が必要である」(James, 1986, pp.190-191)と述べている。これは、霊媒現象の研究者の仮説や結論の選択は、二通りが可能であり、同等の権利がある、という意味である。

プラグマティズムは、アメリカの実用性の哲学の権化と思われているが、「よりよく生きることができれば、その実在は、価値的に「……」実在論的にも肯定される」という、「宗教的実在の容認の哲学的根拠」にもなる。冲永は慧眼にも、注レベルながら、このプラグマティズムの意外な含意を指摘している(冲永、二〇〇七年、三七三、三七七頁)。

ジェイムズが「選択には準備が要る」と言っているのは、それぞれの人の持つデータの量的多寡、質的な高低による、プラグマティックな選択を意味する。仮説や結論、またそれに先立つ方法論、さらには課題や対象も、プラグマティズム的に選択される。それは博打的な決断主義ではなく、準備をした度合いに応じて、自他にとつての信憑性や納得性が増す、ということである。したがって、反省の積み重ねや手持ちの材料が変わると、判断は変わることがある。アーヴィン・ラズロという、現代の重要な思想家を例に、そのプラグマティックな変化を示す。

ラズロに注目する理由は三つあり、一つめは、ラズロがニューサイエンス的世界観のグループで高く評価されていること、二つめは、ラズロが情報とエネルギーの宇宙的連続体のビジョンを、時折ジェイムズを引用してまとめていること、三つめは、ラズロがおそらくはジェイムズの心霊研究をよく知らないで、同じような疑問に突き当たって、同じような揺らぎを示していることである。

一つめ、ラズロの評価は、指導的思想家たちのピアレヴューで高く、現時点でのニューサイエンス的

思想のトップグループにある。たとえばスタニスラフ・グロフは、現代科学の洞察を統合して包括的な「万物の理論」にまとめあげたのはラズロであると評価している。そしてそのラズロの基本的ビジョンである「アカシックフィールド」は、ジェイムズの「宇宙的貯水池」を含む古今東西の神秘思想や自然科学思想と通底することを強調している(ラズロ、二〇〇八年、二〇四頁)。

二つめ、ラズロはジェイムズの「私たちは海に浮かぶ島のようなもの」というイメージで、そのようなビジョンを表現することを好んでいる(ラズロ、一九九九年、二八九頁、ラズロ、二〇〇五年、一三九頁)。

そして三つめ、ラズロの死者観は、意識の存続を思わせる死者の記憶は、「情報体としての宇宙」に由来するとされて、ジェイムズの「宇宙的貯水池」説そのままであったり、あるいは、同じ材料を同じ順序で並べて、おそらく反省だけ変化して、結論が真逆、つまり、肉体の死を超えて存続するこの別の個人は、「どこか別の場所に、おそらくリアリティの別の次元に生きている」「個人の魂(個霊)」という古くからの概念に似たものが生み出されるように思われる」という説明になったりする。世界観、解釈の「選択には準備が要る」と言われる、プラグマティズムの恰好の実例である。この二つの説明は、二〇〇四年第一版の著書 (Laszlo, *Science and the Akashic Field*) と、二〇〇六年の著書 (Laszlo, *Science and the Rebirth of the Cosmos*) のもので、変わり目はそのあいだのどこかである。二〇〇四年段階では、下記のとおりである。

最後に重要な問いかけをしよう。人類がこれまでに問いかけた最大の問いのなかでも最も刺激的なものだ。それは「私たちの肉体が死んだあとも、意

識は存続するだろうか？」というものである（ラズロ、二〇〇五年、二一八頁、Laszlo 2004, p.121）

邦訳書（二〇〇五年）は、原著の第一版（2004）とも第二版（2007）とも対応しないところがあるが、翻訳と原著第一版でのこの問題に関する解釈はつぎのようなものだった。死者が「別の次元の現実のなかに、なおも存在する」なら、これは「真の不死」ということになり、「希望に満ちた結論であるが、真実ではなさそうである（not likely to be true）」。これに対して、もう一つの、「より可能性の高い説明」は「情報体としての宇宙」というものである、と（ラズロ、二〇〇五年、二二五頁、Laszlo 2004, p.160）。

このように「希望に満ちた結論であるが、真実ではなさそうである」と自信ありげに断言されていたのが、原著第二版（2007）では、ややトーンを変えて、哲学者からの書簡の引用という形をとって、「宇宙の絶え間ない経験によって作られる新たなより高い形の個性」「トランスパーソナルな経験の領域」があるとして、「最後の考察」では、「不滅の魂というペレニアルな直観」とは異なるが、「ただ一つのこと、脳と身体機能が止まっても、意識は消え失せないことは確かである」として、個性性の死後持続・不滅が強調されている（Laszlo 2007, pp.127-128）。この死者観は、生者の記憶説には収まらない。

二つの版のあいだ、二〇〇六年の著書では、同じ材料、同じ推論が、結論部で、「魂」や「霊」というペレニアルな言葉に接近し、真逆の解釈となっている。「問題なのは、個人の意識がどのようにして肉体の死を超えて存続することができるのかという点」という設問を受けて、それは「回想の一部として」だろうか、それとも「死んだ後も生きている人々と

コミュニケーションすることのできる、その人特有の『霊』ないし『魂』（integral "spirit" or "soul" of a person）として」だろうか、と選択肢を示す。後者は個人の不死を示唆し、「どこか別の場所に、おそらくリアリティの別の次元に生きている（living elsewhere, perhaps on another plane of reality or in another dimension）」と説明される（ラズロ、二〇〇八年、一〇八頁）。ジェイムズが、死後を含む世界観、解釈の選択において、「選択をするには準備が要る」とうまく表現した、プラグマティズムの恰好の実例である。

ニューサイエンス的形而上学のトップグループにあるラズロが、ジェイムズの「宇宙的貯水池」などをアカシック・フィールドと呼ぶこと、死後の記憶をホログラム的「痕跡」と呼ぶことなど、ジェイムズの用語やビジョンが共通していること、またそして死後生の説明については迷いを共有していることなど、ジェイムズ回帰に注目しておきたい。

## 6 身心変容技法研究、宗教研究との位置関係

ジェイムズ「ある『心霊研究者』の確信」の冒頭に、「創造主はこの自然の一領域が、永遠に不可解なままに留めようと意図しているのではないか、と思いたくなる」という、有名な述べ懐がある（James 1986, p.36）。これは、不愉快で不可解な現象が気まぐれであることを、不承不承に受け入れた証言である。

われわれの共通テーマである身心変容技法を考える際、変容をいかに導くかという「技法」の問題は、実践家（グロフなど）においては瞑想や呼吸のさまざまな工夫となり、理論家（ジェイムズやラズロ）においては「瞑想や祈りによって」「変性意識において」

としてスキップされる。ここで注目した心霊研究は、受動的「他力的」な実践を対象としており、それらはいわば「無技法の技法」といった特徴を示しており、「技法」の概念を洗練する一助となることが期待される。

宗教研究において、ジェイムズの心霊研究は、エピソードとしてはよく知られている。たとえば、パイパー夫人を霊媒とするホジソンの霊界通信を扱った、量的にかなりまとまった晩年の報告（James 1986, pp.33-36）も、管見のかぎり、宗教学、宗教心理学、宗教人類学の大きなテーマである憑依（精神医学では「人格転換」との関連で、細かく参照される例は見当たらない。理由の一つは、心霊研究（その後身である超心理学）の学術世界における地位の不安定さにあるが、たとえばシャーマニズム研究に、心霊研究・超心理学が有益であることは、一九五〇年代当時、大きな期待を持たれていた超心理学との関連で、宗教学者エリアーデや民族学者フィンダイゼンらが期待を表明するところだった（津城、二〇〇五年、二〇七―二〇九頁）。

六〇年後の今日も、同じ期待を述べざるを得ない。「霊媒術」「霊界通信」（心霊研究用語）、「人格転換」（精神医学用語）、「憑依託宣」（宗教人類学用語）などと呼ばれる現象の核には、人間の死後存続という千古の問題がある。ごく最近の心霊研究圈は、この千古の問題に関する一つの有効な糸口となる。

とくに今日、「スピリチュアリティ」が玉石混淆し、宗教が事件化するとき、社会はその扱いに困惑しているが、心霊研究で報告検討された詐欺やインチキの事例が、一定の見通しを与えることが期待される。逆に言うと、心霊研究の知見なしに、宗教・スピリチュアリティの事件化には、対処が難しい。宗教研



究の死角を少なくするという最も広義の意味で、心霊研究は重要である。

最も狹義には、ジェイムズ研究は、今でも宗教学（および心理学、哲学）の課題としてトップグループに属するが、その要の位置にあつたのが心靈研究であることは、伊藤、冲永、堀らの研究が確認している。心靈研究に光を当てなければ、ジェイムズ研究にも大きな死角が残る。ハーバード大学から大部の資料が整備されているが、その翻訳さえも進んでいないのは、弁解のできない怠慢であり、ジェイムズ専門家たちのさらなる参加が望まれる。

## 参考文献

ジェラルディン・カミングズ、梅原伸太郎訳『人間個性を超えて』国書刊行会、一九八六年 (Geraldine Cummins, *Beyond Human Personality*, 1935)

ジェラルディン・カミンズ、梅原伸太郎訳『不滅への道』春秋社、二〇〇〇年 (Geraldine Cummins, *The Road to Immortality*, 1932)

堀雅彦「心霊研究の彼方に——W・ジェイムズが見た宇宙」鶴岡賀雄・深澤英隆編『スピリチュアリティの宗教史（上巻）』リトン、二〇二一年

ニコラス ハンフリー、柴田裕之訳『ソウルダスト——  
「意識」という魅惑の幻想』紀伊国屋書店、二〇一二年  
(Nicholas Humphrey, *Soul Dust: The Magic of Consciousness* 2011)  
伊藤邦武『ジェイムズの多元的宇宙論』岩波書店、二〇  
〇九年

W・ジェイムズ、伊藤邦武編訳『純粹經驗の哲学』岩波書店、二〇〇四年

William James, *Essays in Psychological Research*, Harvard University Press, 1986

William James, Gardner Murphy et al. ed., *William James on Psychological Research*, Augustus M. Kelley Publishers, Clifton, 1973  
E・ラズロー、野中浩一訳『創造する真空（コスモス）——最先端物理学が明かす〈第五の場〉』日本教文社、一九九九年（Ervin Laszlo, *The Whispering Pond: A Personal Guide*

to the *Emerging Visions of Science*, 1996)

E・ラズロ、吉田三知世訳『叡智の海——宇宙——物質・生命・意識の統合理論をもとめて』日本教文社、二〇〇五年 (Ervin Laszlo, *Science and the Akashic Field: An Integral Theory of Everything*, 2nd edition, 2007 [1st edition, 2004])

E・ラズロ、吉田三知世訳『生ける宇宙——科学による万物の一貫性の発見』日本教文社、二〇〇八年（Evin Laszlo, *Science and the Reenchantment of the Cosmos: The Rise of the Integral Visions of Reality*, 2006）

沖永宜司『心の形而上学——ジェイムズ哲学とその可能性』創文社、二〇〇七年

津城寛文『（霊）の探究——近代スピリチュアリズムと宗教学』春秋社、二〇〇五年

[illegible]